

タンザニアにおける農業調査

吉田昌夫

I 概 況

タンザニアの首都ダルエスサラームからインド洋ぞいに南へ延びている道路を、約170キロほど走ると、この国随一の大河・ルフィジ河(Rufiji)の下流平野が急に眼前に広がる。幅約30キロの平野の両側は低い丘陵地帯となっており、平野におりて行くと風のないむっとするような暑さに汗ばむ。河に近い氾濫原地帯は、ものすごいがたがた道で、雨期には4カ月にわたって通行止めとなる。この平野に約10万人の住民が生計をいとなんでいる。わたくしは現在タンザニア政府の水資源審議会事務局の一員として、このルフィジ河下流平野の農業現況調査を行なっているの、その様子をお知らせしよう。

ルフィジ河下流地域は、歴史的に非常に興味ある地域で、19世紀末にドイツがタンガニーカを植民地化した時、まず開発に力をそそいだ場所の一つであった。しかし、その強引な棉花強制栽培方式が住民の反感を買い、1904年のマジマジの反乱となって爆発したのもこの地域からであった。この乱の鎮圧のために多くの人口が失われ、これが反乱の広がったタンガニーカ南部が今日まで発展から取り残された地域となった原因の一つと考えられている。

ルフィジ河は、インド洋から約200キロメートルほどさかのぼった所でスティーグラー峡谷という急流の部分を通るが、ここは将来の多目的ダムサイトとして好適とされている。この点から下流は海面まで80メートルの落差しかなく、海の近くに急流の多いアフリカの河の中ではめずらしく、デルタを形づくっており、農業地帯となっている。自然のままの河は、雨期になると毎年氾濫するが、その程度が年によって著しく異なり、氾濫を利用して行なわれている農業も、その暴威にしばしば悩まされているのである。また、この氾濫のため、首都ダルエスサラームと南部沿岸地域との間の陸上交通は、非常に遅れた状態にとどまっている。

農作物としては、ドイツ時代に導入された棉花が、換

金作物として栽培されているが、主要作物は何と云っても主食用の米である。しかし、その栽培方法はいたって原始的で、灌漑施設は全然なく、東南アジアのような畜力の使用もない。農民は雨期の来る前にくわで耕し、雨期が始まると種を播き、あとは河の氾濫や雨などで水のたまるのを待つばかりである。氾濫の期間が短かければ作柄はよくないし、氾濫がひどくて稲が長期間水に浸ってしまえば、全滅してしまう。氾濫の程度が適度であれば、肥沃な堆積土のおかげで相当高い収量を得ることができる。作柄がよい年のルフィジ郡(ルフィジ河下流平野のみならず、その両側の丘陵地域も含む)は、タンガニーカ全体の米販売量の10%(たとえば1966年)を供給したこともあった。米はタンザニアにおいては、トウモロコシほど主食としての重要性は大きくないが、海岸地帯では主食である。特に人口が急速に増えつつあるダルエスサラームに距離が最も近い米作地帯としてのルフィジ平野を持つポテンシャルは、非常に大きいと思われる。しかし、1968年、69年と大洪水が続き、この2年間は余剰どころか、自家飯米も大幅に不足し、住民はカッサバを食べたり、政府の救援米をもらったりしている。このような状態にあるにもかかわらず、わたくしには、この平野に、アジ研で共同調査に行ったことのある新潟県の蒲原平野のおもかげがなんとなく感じられるのである。ルフィジ平野の将来は、蒲原平野の現在とどのように似て、どのように異なるであろうか。



ウジャマー村の共同作業——稲の播種：ムコング村にて

II 調査の準備

さて、審議会の予算もついて、具体的な農業調査の段

どりに取りかかったのは、1970年7月にはいつてからであった。なにしろ、これまで農業に関するデータがほとんどなく、特に農家経済に関しては皆目わからない所を調査するのであるから、全く基礎的なデータを集めなければならない。しかも必要なスタッフや予算も限られているので、少ないサンプルをもとに調査して全体を推定するほかはないと考えた。調査すべき項目も、グルエスサラーム大学の学者たちや、農林省、経済開発企画省等の人たちの意見をいろいろ聞いて、将来の灌漑計画作成のみならず、灌漑のない現状の改良に役立つ利用度の高いものを入れようと努力した。調査方法も、タンザニアでこれまで行なわれた方法の中から可能と思われる方法を選ぶために、いろいろ意見を聴取した。このためつい、あれもこれもと欲張りすぎた感がある。調査項目は農家所帯構成、保有土地面積および主要農作物作付面積、作付体系 (cropping pattern)、主要農作物単位面積当たり収量、農作業労働投下量、農家所得および支出、と全く網羅的なものとなった。調査期間は1年間を予定した。

調査方式としては、何人かの調査員をアシスタントとして使って、サンプル農家から聴取りにより、あるいは実測によりデータを得る方式をとることになった。農民自身に簿記をつけさせるのは、文盲がほとんどの農民相手の調査には不可能である。調査員と農民との関係さえうまくいけば、インタビュー方式の方が農民はいやがらないということもある。ただ労働時間を測る関係上、1農家当たり週2回訪れる必要があり、訪問の頻度が高いので、うるさく思われる可能性が大いにあった。これまでの経験談をいろいろな人に聞いたところでは、最初に調査の目的を、対象農家のみならず、その村の人たち全員に説明して納得してもらえば、インタビュー方式は十分可能であるとのことであった。けっきょく、教育を7～8年受け、英語もわかる程度のアフリカ人調査員 (enumerator) を12名雇い、インタビューの訓練をし、対象農家の近くに住民を、1人当たり8軒くらいの農家を標準として、調査員に担当させることになった。

Ⅲ サンプル農家の選定

これまで調査らしい調査をしたことのない地域でサンプル農家を選ぶことは、とてつもなく難しいことである。ランダムに選ぶようにも、その枠となる農家リストあるいはそれにかわりうるものが全然ないのである。あるものといえば、人口調査のデータだけである。タンザニアで

は1967年に人口調査が行なわれ、全国の調査区 (enumeration area) ごとの人口および戸数がわかっている。1調査区は人口約500人を目あてとしてつくられている。したがって、この人口調査区は、ランダム・サンプリングをする場合の第1段階のサンプリング・ユニットとして使うことができる。しかし、調査区内の住民のリストは存在しない。これまで、東アフリカの農業調査で、サンプリングの枠としてしばしば使われたリストは、人頭税リスト (tax payers list) であった。しかし、タンザニアでは現在、人頭税を廃止してしまっており、しかも、これに代わるなんらの税も、農民には課せられていないので、税の面からのリストを手に入れることはできない。次に、よく利用されるのは、販売協同組合員リストである。これは、ある単一作物を対象とする農業調査によく使われ、協同組合がその作物の唯一買付者である場合には便利な方法である。しかしルフィジ地域のように、協同組合は存在しても協同組合員リストが存在しない場合や、主要作物が協同組合以外に販売される割合が大きい場所では、有効でない。

これらに代わるものとしては、タンザニア独自のものとして単一政党 TANU (Tanganyika African National Union) の末端組織のリストを使うという方法がある。われわれが第2段階サンプリングとして目をつけたのもこの方法であった。タンザニアは Ujamaa (通常、アフリカ社会主義と訳される) を国是とする社会主義国で、その社会主義政策の推進をになう単一政党 TANU の末端組織は、たいへんよく整備されている。村段階以下は、TANU の末端組織が、そのまま行政組織になっている。すなわち、江戸時代の五人組に似た10軒組という制度があって、すべての家がこの組織に組み込まれていることになっている。10軒組の長の家の前には、よく TANU の旗がひるがえっている。われわれの考えたことは、まず第1段階として人口調査区をランダムに選び、次に、その人口調査区に行って10軒組長に皆集まってもらい、調査の趣旨を説明して、皆の目の前でくじ引きをやり、特定数の組長を選んでから、今度は、その組長に自分の組の者10人の名前を出させて、またくじ引きでサンプルとなる農家を選ぶという方法であった。

このアイデアも、実際に行なってみると、簡単にはいかないことが分かった。まず最大の難問は、この地域において1967年の人口調査以後、大規模の人口移動が起こったことである。具体的にいえば、1968年の大洪水の際、氾濫原に住んでいた人たちを、政府が全員 (ある場合は

強制的に)河から相当離れた高所に移動させることにし、タンザニアが現在農村開発の中心的政策として推進しているウジャマー村 (Kijiji cha Ujamaa) を22ヵ所設置して、これへ収容したのである。したがって、これまでは自然堤防のような所へ、リボン状に細長く村がつくられていたのが、住民数2000人ずつの集村形態がこれに取ってかわったのである。しかし、このウジャマー村への移動も、氾濫原の住民の100%とまではいかず、特に下流の海に近い部分では、まだ相当数の農家が河に近い今までの住居に残っていることも判明した。以上のような状況にぶつかっては、サンプリングの方法もいろいろ妥協せざるをえない。このためわれわれの調査区域を上流と下流の2区域にわけ、ウジャマー村への移動がほぼ完全な上流区域では、人口調査区ではなく、ウジャマー村のリストを第1段階サンプリング枠として使用し、下流地域では人口調査区を使い、もし選ばれた人口調査区から全員が移動してしまっていたら、移動先のウジャマー村へ行行って、元の人口調査区住民をさがしあてることにした。

このように、実際やってみると、全くややこしいことになったが、とにかく、郡役所から、選定した各村の村長に調査の趣旨を通知してもらい、次に、実際に各村長に会って、何月何日何時に村の10軒組長全員に集まってもらいたいと依頼してまわった。結果として、15の村でくじ引きをやってサンプル農家を選び出すことになったのである。

最初に出かけたムタンザというウジャマー村では、初めてのことに、うまくゆくかどうか心配だった。わたくしとインド人系タンザニア人の助手1人、調査員のチーフ役のアフリカ人1人、それに地区執行官 (ward executive officer) が来てくれて、村に着くと多勢の人が群がっていた。何ごとが始まるかとやって来たやじ馬が、集まってもらった10軒組長20人にまじってがやがやしている。われわれはコンクリート造りの村裁判所に導かれ、村長 (村の TANU 委員長も兼ねる) と一緒に裁判官席にすわった。この建物は、裁判だけでなく、村で寄合いをする時に集まる場所にもなっているのである。集会はまず村長と全員のウフルノ (Uhuru, 独立の意) ウフル・ナ・カジノ (Uhuru na Kazi, 独立と仕事の意) カジ・ヤタヌノ (Kazi ya TANU, TANU の仕事の意) のシェプレッヒ・コールで始まり、まず地区執行官が、政府からの伝達事項その他事務上の話をやり、ついでわたくしを会衆に紹介してくれた。わたくしは通訳つきでこの調

査の意味を説明し、くじ引きで農家を選びたいことを伝えた。ところが、これに反対する何人かの10軒組長がいて、自分たちに適当な農家を選ばせろ、といい出したのである。これには困って「この調査では、よい農民も悪い農民も含まれねばならない。あなた方に選んでもらったら、よい農民ばかり選んでしまうだろう。」といってやっと切り抜けた。どうやら、後でわかったところによると、選ばれた農民はわれわれに雇われることになることと誤解していたらしい。一時はどうなることかと思ったが、やっと納得してくれたようなので、紙切れに1枚ずつ10軒組長の名前を書き、それを丸めて帽子の中に入れ、代表数名に出てきてもらって紙切れを選ばせた。さらに、名前の当たった組長に、同じ方法で、10軒の中から1軒をくじ引きで選んでもらった。くじ引きを実際に始めると、皆大いに楽しんで、当たった人の名前が呼びあげられると、「神様のおぼしめしだ」と声があがったりした。

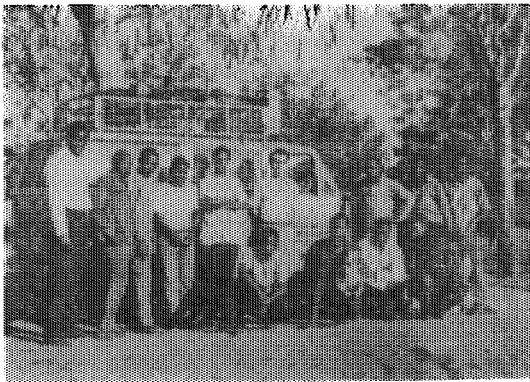
こうして、ようやく最初の村を終り、次の村へと同じやり方を繰り返していった。会合は、いつも寄合いの場所となっている大きな木のかげで行なわれることが多かった。ある村では、ちょうど州知事が来ていて、会合と一緒にやることになり、州知事の話の後、農民を選ぶ方法を説明したら、知事が村側の方で代表を選ばせたらどうだといひだして、相手が相手だけに説明に苦心し、他の村でもこの方法をとってきたからと説明して了解してもらった。

ある村では、政治演説をぶち始める者もいた。ある村では、われわれを販売協同組合の関係の者だと誤解して、協同組合に対する非難を長々とやった者もあった。実際協同組合に対する農民の反感は相当なもので、われわれを協同組合になぞらえて、政府のやることは信用できんといった例が二つの村であった。農民を守る立場にあるはずの協同組合がこんなに農民からきらわれているというのは、商業資本に苦しめられたことがないからであろうか。現在、米、綿、カシューナッツ、ごま、ココナッツ等この地方の主産物全部が、販売協同組合によって、独占的に買い付けられ、しかもその協同組合に金銭的ごまかしが多いことが、最近大きな問題となっている。さらに加えて、この地域では、ウジャマー村ができた時に、今までの単位組合を、政府が勝手に統合、分離したので、ことさら反感が強いようである。

そこへわれわれがいて、また政府が何かやるというのだから、疑惑の目で見られるのは当然のことかも知れない。政府は、いつもわれわれに命令ばかりしているか

ら協力しない、といった頑固そうなじいさんもいた。その「政府」を代表して話しているのが日本人なのだからますます疑わざるをえないであろう。しかしこの時は、出席していた若い人たちが、政府はわれわれの政府なのだから協力しよう、とわれわれを支持してくれたのであった。

またある時は、途中、車が木の切かぶに乗り上げてしまっ、ジャッキを使ってようやく脱出したが、時間におくれて、集まっていた人が帰ってしまったり、日射病にやられて、頭ががらがんしたりしながらも、ともかく80戸のサンプル農家を、予定よりあまり遅れずに選ぶことができたのは、全く、われわれの調査に好意を持ってくれた村の若い層および地区執行官たちの支持のおかげであった。この各村での集会を通じて非常に印象に残ったのは、農民が、憶せず堂々とよく発言することである。ほとんどが文盲で、自分の名前も字も書けないような人々であるが、今まで、あまり庄政というものがないからか、村長とかさらには州知事のような権威者に対しても、議論をしかけるのである。そういった意味では、タンザニアの村落レベルでは、民主主義が大いに生きているようにみえた。



筆者と調査員たち——キリマニ村にて

IV 調査員たち

この調査には、アフリカ人（もちろんタンザニア人）12人を村に住み込む調査員として使うことになった。12人のうち、1人は、いわゆる field supervisor で、他の11人との連絡および集計用紙の分配、収集、週合計の計算等をやる。このユギという名の33歳の男は、非常に精力的で、仕事にたいへん興味を持ち、サンプル農家選定の際にも、ずっと通訳として活躍してくれた。他の11人

のうち4人は、わたくしがダルエスサラーム大学のイギリス人研究者からゆずりうけた人たちで、この調査に来る直前までは、タンザニア南部のイリンガ地方で、1年間同じような農業調査の enumerator をしていた経験者である。この調査を始める際に、enumerator として、ぜひとも経験者が欲しいと考えていたので、わたくしとしても、この4人が頼りであった。後の7人のうち6人は、現地の郡役所で、適当と思われる青年を集めてもらって、試験して採用した人たちである。この現地採用者の方も、農民との関係をスムーズにするという意味で、わたくしは重要視していた。インタビューの経験はあるが、遠方の部族出身で現地をよく知らない調査員と、現地をよく知っているが、調査方法を知らない調査員が協力しあえば、うまくいくだろう、と期待していたのである。残りの1人は、最初11人のつもりだったが、村落間の距離が遠いので1人ふやすことにして雇った。これも遠方部族の出身であるが、かれのお兄さんが郡役所の会計をしているので、現地に縁がないわけではない。全員が7年または8年の初等教育を受けており、年は18歳から33歳までで、英語は皆一応わかるが、現地採用の者の英語は心もとない。しかし、インタビューはすべて国語のスワヒリ語でやることになっており、用紙への記入もスワヒリ語である。タンザニアは、アフリカではめずらしく、一つの現地語が国中どこへ行っても通用する所である。

本番の調査の始まる2週間ほど前に、この調査員たちのトレーニングと調査用紙および質問事項が適当かどうかの検査を兼ねて、実地訓練を行なった。訓練の場所は、ちょうど対象地域の中心部にあるキリマニというウジャマー村で、ここに繰綿工場がある。その工場はもとギリシャ人が経営していて、工場経営者が住んでいた家が、現在の工場所有者である沿岸地方協同組合連合会 (Coast Region Co-operative Union) のゲスト・ハウスとなっているが、これを借りて住み込み、寝食を共にして、お互いによく知りあうことを目標にした。

キリマニ村は、実際の調査のサンプルには選ばれなかったのであるが、中心部に位置するので、この付近のウジャマー村としては代表的な所と思われた。調査員を二つの組にわけ、4戸ずつ農家を割り当て、インタビューのトレーニングをしたが、この時、イリンガ地方から来た経験者が、現地採用の初心者に、聴取りのコツを教えてくれたりして、実に役立った。また、実際に農場をよく見て、付近の農業の特徴をつかむために、村の長老

にほうぼうの農場へ案内してもらった。この時に、ルフィジ河の川原へ出たので、砂の上を歩いていると、何か動物の足あとが点々とついている。何の足あとかと長老に聞くと、ライオンだという。川の方へ、行きと帰りの足あとがついているので、水を飲みに来たらしい。ルフィジ郡は、東アフリカ最後の野生動物の秘境といわれるセルス・ゲーム・リザーブ (Selous Game Reserve) が近いだけに、野生動物がウジャマー村の近くにもうろうろしており、象、かば、野牛、いのしし、猿等が多い。しかし、ライオンは、あまり考えていなかったのも、村と村の間を自転車で行き来しなければならない調査員たちは大丈夫だろうか、と少し心配になった。

トレーニング期間の後半は、調査員たちを担当の村へつれて行き、住む家をさがしたり、といった仕事が多かった。こうして9月1日、本調査開始にようやく間に合ったが、やはり最初の1カ月くらいは、調査員たちの調査票への記入ミスが多く、いろいろ説明不足だったことが後からわかった。

しかし、ともかく、この調査に従事する者皆が、よくお互いを知りあう、という第1の目的は十分達せられたように思う。また、調査員たちも皆陽気で、冗談をいあうのが好きで、なかには、あまり酒好きで、給料を酒につぎ込んでしまうものいるが、単調な生活を楽しむ技術を心得ているようである。ほぼ5カ月の調査が終了した現在までの脱落者は1人だけであった。これは現地採用の者で、住んでいた村の水が悪いという理由で1カ月ほどでやめ、現地からまた1人採用して補充した。

V ウジャマー村

この調査のサンプル農家は、ほとんどがウジャマー村の住民なので、このタンザニア独特のウジャマー村というものの実態はどのようなものかを、ルフィジ郡という特定のケースに限られるとしても、ある程度観察することができる。

ニエレレ大統領は、自助を重んずる考え方から、農民たちが自主的にウジャマー精神 (ウジャマーは、もとの意味は家族であるが、この場合は、協同体と訳するのが適当であり、また前述のように社会主義と訳されることもある。) にのっとなって、共同作業をするウジャマー村をつくることを望んでいるが、ルフィジ河下流域地域においては、1968年の大洪水の避難対策として、政府の指導のもとにウジャマー村ができた。このため、なかば強制的に移動させられた者が多く、移動してから初めて、共同作

業をしなければならないことを教えられた。社会経済的にいえば、二つの大変革がかれらに課せられたといえるだろう。一つは散村から集村へのプロセスであり、もう一つは家族単位の農業から、村単位の集団農業へのプロセスである。

散村から集村へのプロセスは、散村が圧倒的に多いタンザニアにおいては、大きな意味を持っている。末端と中央政府との意志の疏通、教育、医療、水道等の施設の設置、農業改良普及事業、その他の啓蒙事業の遂行等多くの面について、集村化の必要が、タンザニアではことごとくに叫ばれる。ルフィジの洪水避難対策として、集村化がすぐ結びついたのは、以上の点から容易に理解できる。そして、政府はただちに、これらウジャマー村のほとんどに、小学校をつくり、深井戸のポンプ揚水による簡易水道をもうけて、社会環境の改善に努めたのである。現在、ルフィジのウジャマー村で、すぐ目につくのは、コンクリート造りの学校校舎と教員宿舎であり、水タンクである。これらは、土かべに草ぶきの一般住居と著しい対照をなしている。水くみが大仕事であった女の人たちや、学校に行けるようになった子供たちにとって、この集村化がもたらす恩恵が非常に大きいものであることは間違いない。

もう一つのウジャマー村の課題である、家族単位の農業から、村単位の集団農業への転換の方はどうであろうか。

タンザニアのウジャマー村の大多数の現状は、新規に開墾した土地を、各戸にほぼ平等に分配し、耕起、収穫等を共同で行なう型と、前からの保有農地は、そのまま家族が耕作し、他に村の近くにウジャマー農場を開墾して、これの共同作業に全員があたる、という型とに分けられるが、ルフィジ郡のウジャマー村は、後の型に属する。ここのウジャマー村の最大の難問は、氾濫原から離れた高所に移動して村がつくられたために、川べりに多い家族農場からの距離が、ものすごく遠くなってしまったことである。家族農場まで片道10キロ以上を歩く人は、いくらでもいるし、さらにカヌーで河を横切って、対岸を耕している人たちも少なくない。氾濫原の家族農場は、河の氾濫の状態に作柄が大きく左右されるが概して、堆積土のため地味が肥えており、農民は、これを離れたがらない。そして長い時間を費して、特に、農繁期には、野営もして、自分の土地を耕しに行く。

村の近くにつくられた、ウジャマー農場は、林を伐採して開墾した所が多く、このような所は地味が悪い。こ

のため、最近では、数カ村で氾濫原の家族農場を収用して、ウジャマー農場をつくったところまでできている。これらウジャマー農場では、村により異なるが、だいたい週3日か4日全員が働くことになっている。ところが、出勤率が非常に悪い。ウジャマー農場の生産物は、出勤時間に応じて分配されることになっているが、やはり農民は計算高く、家族農場で働いた場合の生産物と比較して、ウジャマー農場は不利であると考えられるものが多いらしい。共同作業に出ることの強制は、あまり行なわれていないようで、最近聞いたことであるが、あるウジャマー農場では、稲の播種が少しもはかどらず、ある者が村長等、村のリーダーをつき上げて全員出勤させ、ようやく作業を終えた、ということがあった。

ルフィジ河氾濫原において、ウジャマー農場への出勤率が悪いもう一つの理由は、河における漁業の比重が、非常に高いことである。ここの農民は、すなわち漁師であって、このため何日も家を留守にする。これも調査を

やって気がついたことであるが、漁業は、かれらにとって唯一のコンスタントな収入源である。われわれの調査でも、対象農民が漁に出てしまうため、インタビューが非常にやり難いが、ウジャマー農場運営の面でも、これはやはり大問題に違いない。

タンザニアとしては、ウジャマー村を基礎とした社会主義建設の道は、天下に明らかにしたかれらの理想である。しかし、以上のような、ウジャマー村が遭遇している種々の問題は、単に村民を政治教育するだけでは解決しないであろう。わたくしには、その解決方法が正直にいつてわからないし、タンザニア人がみずから、この問題を解決してもらいたいと思うだけである。ただ、その解決方法を模索するうえで役に立つようなデータを、われわれが、現在行なっている農業調査で、少しでも提供できたらよいと考えているしだいである。

(筆者は、OTCAより派遣され、現在、)
(タンザニア水資源審議会事務局に勤務)

アジア経済研究所刊行

海外投資シリーズ

メ キ シ コ
——経済と投資環境
岡部 広治 編
A 5 判/474頁/¥1500

▷背景/自然・住民・歴史/政治・社会・文化・教育▷経済/国民経済/経済政策/各産業の現状/財政金融と貿易管理/労働事情▷日本との関係/メキシコとの貿易/日系企業▷資料/メキシコの日系企業に対するアンケート/メキシコに投資している日本の企業に対するアンケート▷付録/メキシコ合衆国憲法/新規・必要産業助成法/企業体制/参考文献▷文中図—23図/表—152表

研究双書第174集

モンゴルの政治と経済
坂 本 忠 著
A 5 判/206頁/¥650

躍動するモンゴルを、その自然と住民・歴史・政治・経済全般にわたって多角的に権観する▷自然と住民▷歴史—非資本主義的發展の道/モンゴル革命の性格/2段階革命と反封建闘争/社会主義建設▷政治/新憲法と政治機構/モンゴル人民革命党/国際関係▷経済▷社会・文化▷資料/人民共和国年表/人民共和国憲法/人民革命党綱領/人民共和国農牧業協同組合模範定款

アジア経済出版会発売